

日本の山旅・平野ガイドから8月のお便りその2

★番外編その1：クマの話★

山歩きで一番危険で要注意なものは雷とクマですね。雷には近づかないのが一番。日帰り登山でその場所に雷注意報発令の場合や、登山口ですでに雷が近くでなっているような時は、中止するのが賢明です。また山の途中で雷に出会ったなら、それ以上無理をせず、一刻も早く下山するのが一番。もし雷の真っ只中に入ってしまったら、避難小屋があればその中で、小屋がなければ身を伏せて雷が通り過ぎるのをじっと待つ。そんなときは先を急いで雷の中を歩きだしてはなりません。



そうした鉄則を心して守れば、雷の被害は最小限に抑えられるでしょう。

一方、クマは如何に。私は山歩きを始めたころ、そして数年前まで山歩きで一番恐ろしいものはクマで、できるだけクマと出遭わないところを歩きたいものだと思っていました。とはいうものの、北海道は勿論のこと、東北を中心とした山や原生林の中に、クマはどこにでもいる訳で、クマを避けていては素晴らしい大自然の中を歩くことは不可能なことです。なので、一人で山を歩く時は、クマ鈴を鳴らしながら「クマよ出てくるな」と不安な気持ちで歩いたものでした。

●クマとの付き合い方：大江初三郎・北海道ニシン番屋長老の話

本来野生のクマが一番恐れているのは人間で、クマの方から人を襲うようなことは決してない。藪の中でバツリ出くわしたりした時は、人を恐れ自己防衛で襲ってくる。また突然出会って人が背を向けて逃げると、野生本能で後を追いかけてくるのだ。クマは遠くから人間の存在を察知したなら必ずその場を離れるもので、藪に身を潜めているクマが突然人を襲いに出てくることなどない。だからクマのいそうな山や森を歩く時は、クマ鈴や笛を鳴らして人間の存在を知らせることが何より重要なことだ。ということは重々分かってはいるものの、クマとの遭遇の不安なしに歩くことは難しいし、そうした理論を証明する確証も、また実体験もない。

そんな私が、クマとの遭遇を殆ど不安なしにブナ森を歩けるようになったのはごく最近のこと。以前、北海道羅臼のニシン番屋長老のTVドキュメンタリー番組でクマの話が出た。私はそれを見て、これまで何となく思っていたクマとの付き合い方が正しいものと確信が持てたのです。

＜大瀬初三郎・人とクマの特別なきずな＞長老曰く…

クマが人を襲うのは、人がクマより弱いと思うからだ。

だから「何やってんだお前!!」とクマを叱る。

そうするとクマは人より弱いと思うので逃げる。

「ただ遊んでいるときは黙っている。こっちにきたら怒る」

そういうことなのだ、よく分かった。

●竜が森8合目のクマ：初めての接近遭遇、山のクマは素直だった

私が初めて山でクマと近くで出会ったのは、その翌年、森吉山の帰りに竜が森を歩いた時のこと。比内地方にあるこの山には伐採から逃れた素晴らしいブナ原生林が残り、訪れる人も少なく、山道は腐葉土の柔らかな自然道、本来のブナ森歩きを楽しめるところです。

素晴らしいブナ道をたどり、ようやく八合目が近づく頃、前方のブナ広場で何か黒い塊が動いていると思ったら、どうやら熊がこちらに尻を向けてブナの実を一生懸命食べている様子でした。私は10mほど手前で「おークマよ～」と声をかけると、熊はこっちを振り向いてしばし対面。私は「何してた。俺は何もしないから家に帰れ～」と強そうな態度でクマに話しかけると、熊は一瞬だけじろぎ、ドサッと向きを変えてササ藪の中に逃げ去ったのでした。そのクマは、ブナの実やドングリの豊富な森の広場で、美味しい餌を無心にむさぼり食べていたのです。そんな時、それに気づかず無言で近づき、突然バツリと出くわしたなら、クマはびっくりして自己防衛でこちらに襲いかかってくることでしょう。まだ逃げるゆとりのある距離で声をかけたから、「あっ、人が来た!」と藪の中に退散したのでした。やはり山のクマは素朴で素直な動物、実に穏やかな目をしていました。 - 1 -

この竜が森八合目でのクマとの出会いは、私としても初めての体験でしたが、これで熊との接し方を確信したのです。山のクマは人間が一番怖いから、突然バツリ遭ったら襲ってくる。だから熊に人間の存在を早めに知らせる事が一番肝心なこと。熊がいそうなところでは、まずこちらから熊を見つけて早めに存在を知らせる。そしてもし近くで向かい合ったら、目をみて話しかける。自分が熊を攻撃しないことや、怖がって逃げたりしない態度をみると、熊は必ず自ら去っていくものなのです。これまで私が思っていたことが正しいと確信できた素晴らしい体験でありました。

●秋田白神・藤里駒ケ岳の親子熊、母グマも無用な危険は避けるもの

その次にクマと近くで遭遇したのは、秋田白神・藤里駒ケ岳でのこと。この時は3名のお客を案内していた時で、しかも親子熊という最要注意の遭遇ケース。とにかくクマとの遭遇で一番要注意で危険なことは親子熊との出会いだ。子連れの母グマは子供を守るために、敢えて恐ろしい人間といえども立ち向かってくる。もし子熊がいたとしたら、たとえ可愛いといっても決して近づいたりせず、すぐにその場を去ることが肝心だ。必ず母グマが近くにいるから、子熊に手を出すことはないことを母グマに分かるよう？子熊を無視して立ち去ることだ。子連れの母グマとしても、何もしようとしない人間に対して、むやみに攻撃することはない。これも突然バツリと出遭ったり、笹藪をかきわけて自分たちの領域に立ち入ろうとするような場合は、全力で人間を撃退しようと向かってくるのは当然のこと。普通のクマの場合同様、遠くから人間の接近を察知したなら、子熊を連れて安全な場所に移動するものだ。人が来たからといって、むやみに無用な攻撃を仕掛けてくることなど決してないはず。そのことを実際に確信できたのは、この藤里駒ケ岳での母子グマとの出会いであった。

秋田白神山地の主峰・藤里駒ケ岳は、藤里の町から黒石沢林道終点まで車で乗り入れ、藤駒湿原経由で頂上を目指し、帰りは新道で周遊するコースを取る。周囲をブナ原生林に囲まれ、特に藤駒湿原から六合目にかけてのブナ森は日本第一級の素晴らしい場所である。六月新緑の頃は根曲がり竹、十月紅葉の頃はブナの実やミズナラのドングリ、いずれもクマの大好物の食料が豊富にあり、クマがいるのは当然の場所だ。だからそこを歩く時は、いつでもクマのことを頭に入れて、クマと突然出会わぬよう細心の注意が必要で、ほっと歩いてはいけぬ。私はこの地域をこれまで30年近く歩いていたが、未だクマと出遭ったことはなかった。もちろんクマは藪の中にいたはずであるが、それなりの歩き方をしていたから、クマの方から事前に姿をくらませていたからなのだろう。

10月紅葉真っ盛りのこの日、藤駒湿原から素晴らしいブナ森に入って行った。周囲のブナに感動しながら歩いていくと、前方から一組の中年カップルが歩いてくるので「もう頂上へ行ってきたのですか」と話をすると、「クマがいたので引き返してきました」とデジカメの写真をみせてくれた。そこには大きな黒い塊が登山道の真ん中にどっしりと構えていた。よく見ると手前に小さな塊が重なり、これは親子熊に違いなかった。

以前の私なら、ここで引き返したことだろう。また一般的にはそれが無難なことだが、クマとの付き合い方にある程度自信のあった私は、3人の客を連れて先に進むことにした。私は彼らが言っていたクマとの遭遇場所のおよその見当はついていて、おそらく5合目の先、緩やかな幅広いブナ森のあたりだろう。その場所が近づくと、私は鈴をやや勢いよく鳴らし、遠くのクマに分かるように時折掛け声をかけながらゆっくり歩いて行った。もうそろそろかと思いながら、左手にカーブするコーナーを回り込んだ瞬間に、子熊を従えて5合目ほど先の登山道を横切る姿を見た。クマもこちらを振り向き警戒する様子もなく、私もその様子を無視するように極自然にその場を通り過ぎた。まるでお互いに無関心、面倒なことに関わりたくないという感じで、あっという間にすれ違ったのである。コーナーであったこともあり、その場面は後ろから着いてきたSさんたちは全く気が付かなかったようだ。

私は彼らに何気なく「クマが逃げたよ。」と伝えるが、彼らはさほど動じず、黙々と私の後を歩き続けた。普通なら親子熊とすぐ近くですれ違ったといえ、恐怖におののきこの先不安でパニックにでもなるところ、よほど肝が据わっているのか、はたまた親子熊とごく自然にすれ違ったという

ことの稀なる貴重な体験、有難さを理解していないのか。ともかくその後、何もなかったかのように頂上を目指した。

おそらく我々とすれ違った母子グマは、危険が去った後また元の場所に戻ることだろう。私としても、登りよりも速いペースで見通しのききにくい下りで、また母子グマと会うのは真っ平御免だ。幸い、頂上からの下りは東に回りこんで下る新道コースなので、この日、同じクマに出遭う心配はない。という訳で、我々は頂上で安心してランチタイムを楽しみ、錦の紅葉真っ盛りの新道をゆったりと下って行ったのである。

蛇足：この頂上で2人の青年と話をした。彼らは新道から登って来たので、下山は今我々が登ってきた旧道を下るといふ。クマとの接し方の知らない者が、母子グマのいる領域を歩くことは危険極まりない。何も知らずに笹藪の登山道をガツガツと下り、クマが逃げる間もなく遭遇したらどうなるか、最悪の結果は目に見えている。私は彼らに新道を下った方が身のためだと強く諭し、彼らもそれに従った。ということで、万事めでたしめでたし。

●岩手山黒森・夕暮れ暗闇の中で2度の遭遇、史上最大の難関突破物語

岩手山スカイラインは8合目まで伸びる有料自動車道路で、そのカーブの数は69もある。その#26カーブに「巨木の森」というブナ森の入口がある。以前はその精気溢れる森の広場で「巨木の森コンサート」が開かれていたが、最近では手入れが行き届かず訪れる人稀なブナ森になっている。何しろその「巨木の森」は、入口からほんの3分百丈笹藪をかき分けると、極上のブナ林に囲まれ、岩手山の中でも別世界。これまで何度か機会ある度にツアー中やその合間に訪れていた私のお気に入りの場所だった。

●岩手山自然保護の先駆者・三浦章男さんの貴重な黒森山情報を見て…

5年ほど前にネットに載っていた「岩手山を考える会・事務局日誌」のレポート「巨木の森」への道を歩く」という記事を目にした。当時の事務局長・三浦章男さんの話によると、「巨木の森」から黒森山にかけて、「巨木の森」を遥かに凌ぐ素晴らしいブナ森があるという。以下、記事抜粋…

現在の「巨木の森」は名前に偽りありだと私は常々思っている。何を以て「巨木」とするのか、その意味ははっきりしないが、「大木」指して言うのであれば、現在の「巨木の森」と指定された場所の近くに、そこよりも遥かに立派で、大きく太く、しかも幹を数本束にしているようなブナが存在する場所があるのである。それはどこか。現在の「巨木の森」は27番カーブ(実際は26番)のところから入るが、そこはさらにカーブを10ほど登った35番カーブから入る場所だ。西には黒森山が聳え、緩やかな黒森山山麓一帯、そこは広くてゆったりとした森である。それこそブナの「巨木」が乱立している。そこから「黒森山山頂」まで散策路を敷設すればいいだろう。だが、現在の「巨木の森」のように土石を開濫して造る碎石を敷いた道は必要ない。人が通れる幅でいい。刈り払いをして順路標識を設置する程度で十分である。ブナ林内というものは樹下の藪はど発達しない。ギャップが存在しない限り下草や低木は成長しない。数年に一度の刈り払いで十分「散策路」は確保されるはずである。標高887mである「黒森山山頂」からの眺めもいい。東に聳える岩手山とどっしり対峙して揺るぎがないのだ。…

新しく「巨木の森」散策路を造るという噂も聞こえてきている。その時にはこの場所を推薦したいと考えている。もちろん、気持ちとしては「私も参加しながら散策路の策定にあたりたい」のである。

私はこの三浦さんの考え方に共鳴、私の山歩きに対する考え方と共通するものを感じた。岩手山の自然に精通し、ブナ森をこよなく愛するこの先達に是非お会いして話を伺いたいものと思っていた。しかし残念ながら、彼がこのブログを書いた翌年(2010年11月29日)がんのため死去されたとのショッキングなニュースを同局の日報で知る。これから自然を愛する同志として親交を深めていきたいと思っていたのに、本当に残念なことである。志半ばで急折された三浦さんに心から冥福を祈りたい。

そんな訳で、この黒森山に関する資料は唯一この文のみとなり、後は現地自分で開拓するほかはなくなってしまった。私はその後2017年の10月に、白山山地のツアー前日によやくこの地を歩く機会を得た。

●初めての黒森山新ルート探索…ほんの下見のつもりが思わぬ方向に…

その日、横浜を早朝出発しても、さすがに弘前から現場に着いたのは午後1時を回った遅い時間となった。スカイラインのゲートで係員の人に今から上まで行くのかと聞かれ、「巨木の森あたりを少し歩いてみるだけ」と伝えてスカイラインに入って行った。このゲートは午後5時に閉門とあるから、絶対にそれまでに戻らねばならないので、この日は黒森への入口を見つけることや「巨木の森」への周遊ルートなど、ほんの下見程度にしておこう。

まずは35番カーブ付近の入口は如何にと周辺を探すが、何しろあのネットの情報は3年以上も前の状況なので、入口とみられる場所やその周辺は手強い笹藪に覆われ、中に入る場所がなかなか見つからない。何とか無理やり中に入り、すぐに小さな沢を渡ると、そこには藪も少ない素晴らしい原生林が広がっていた。この辺りを北西方向にほぼ水平に進めば、黒森の東にあるブナ森のコルに出れるはずだが、今回はあまり遠くまでは足を伸ばせない。そこで途中から下の入口となる「巨木の森」へのルートを探ることにした。

黒森山へのブナ森を1時間ほど彷徨した後、今度は逆方向から一番近そうな藪をかき分けてスカイラインの入口、35番カーブ付近の道路に出る。やはりここから中に入るのは少々難しいので、止めてあった車に戻り、26番カーブの「巨木の森」入口から黒森へのルートを探ることにした。

かつて何度か訪れていた「巨木の森」は標高およそ760m、北側に藪の少ないブナ森の斜面が上部に続いていたことを覚えている。いつかこの斜面を登ってみたいと思っていたが、これがさっき歩いた黒森へのブナ森に続いているに違いない、標高差は100m程度だから大したことはない。「巨木の森」の斜面を北東方向に登って行った。所々に藪はあるものの、ルートを選べば結構歩きやすいブナ森の斜面が続き、時折「巨木の森」を遥かに凌ぐブナの巨木もある素晴らしい森である。

やがて30分ほどで標高770mあたり見覚えのあるブナ森に到着、ここから東に少し行けばスカイラインに出ることができるので、車に戻るの簡単だ。しかしまだ5時までは大分時間があるので、さっきとは違うルートで黒森方面へ少し歩いてみることに。10分ほど歩くと、かすかに刈り払いされた道を発見、時折赤テープのマーカーもある。これは三浦さんが言っていた黒森への散策路作業がいよいよ進んでいるのかもしれない。このまま先に進みたいが、今回はそれほど時間がないので、この新道らしき道に戻ることにした。しかしマーカーの付けられた道は上に向かっていたので、これでは車に戻るのに大分遠回りになりそう。それよりもさっき登ってきた逆コースで「巨木の森」へ戻った方が早いだろうし、疲れる車道歩きはなくなる。という訳で、私は途中からこの新散策路を外れ、道なきブナ森の斜面を「巨木の森」目指して下って行ったのである。この時、無難なコースでスカイラインに戻ればゆとりを持って4時ころには着けたものを、この欲張りな今回の史上最悪の壮絶なブッシュウォークへのプロローグとなるとは。

●夕暮れ、暗闇の中で2度の大グマとの遭遇、史上最大の難行山行に…

…その後のいきさつは順を追って語るにはあまりに長すぎる物語になるし、私自身も正確な順路を覚えていない。その記憶の断片を辿ると…

「巨木の森」に戻るためには、さっき登ってきた斜面を辿れば20分ほど下り着くだろう。しかしそんな甘い希望的観測とは裏腹に、どこまで下ってもそれらしき森の風景は見当たらない。これは一つ沢を間違えたかと思い、左方向にトラバースと登り返しを繰り返して尾根に出てみる。そろそろ夕暮れも迫り、また藪の少なそうな斜面を下って行くと、前方にかなり大きな黒い塊が視界に飛び込んできた。明らかにこれまで以上に大きなクマだ。しかし時間のロスの許されないこの場で、後戻りするわけには行かない。私は立ち止まることなく、クマに向かって力強い声で「おーいクマー、俺は今大変なんだー。そこをどけー！」と叫んだ。大きなクマもその声に怯んだのか、すぐにその場を去って行った。

私はそのまま直進したいが、クマのいるところを横切りたくなかったので、やや右に方向転換してさらに森を下って行った。これもまたその後ルートをと

さらに間違っただけの原因だったのだろう。その後、かなり下りすぎたことに気づき、左方向にあるはずのスカイライン道路を目指すことにした。ところが、笹藪は未だかつてないほどの強烈な密生状態となり、1歩進むためにどれほどの体力、時間を労したことか。これはかなわぬと、トラバースは中止、藪の少ない下方向を目指しなおも下って行く。

やがて前方に植林が広がっているのを見つけ、今度はそれを目指して進む。植林があるということは、必ず林道があり里も近いということだ。その頃から雨も降って来るし寒くなってきた。もうすでにヨレヨレ状態で植林に辿り着く。ところが、そこはすでに放棄されたかのような荒れ放題の植林で、その林内はイバラのブッシュと沼地の湿地帯。疲れ果てた体と心をさらに打ちのめするような悪夢の彷徨の連続。私はとことん疲れ果て、今回だけはもうダメか、ここで野宿でもしたら疲労凍死かクマの餌食かと弱気になる。私これまで30年以上、ニュージーランドでもまた日本でも、どんな困難なブッシュウォークでも、窮地に陥った時には神様に救いを乞い、必ず助けられてきた。しかし今回だけはさすがに遂に神に見放されたか、神も自分の未熟さ無謀さにいささか愛想をつかし、天罰を下されたのかとも思った。

しかし、何が何でも明日からの山旅ツアーを台無しにするわけには行かないし、まして山で死ぬなど絶対にあってはならないことだ。私は最後の気力を振り絞り、再び藪漕ぎ大奮闘。ようやく広々とした畑地に飛び出した。作業小屋もあるし、近くに林道もある。これで何とかなるだろうと初めて一安心、しばし一服のひと時。もうすでに5時を回りゲートは締まっているが、里に下りて関係者に連絡が取れば何か方法はあるだろう。

しかしこの広大なトウモロコシ畑を回り込むのに、泥んこの畦道に難渋、里へと続く林道も定かでない。そろそろヘッドランプでの夜間歩行となり、手持ちのLEDライトと2灯流で作業道を下って行くと、前方の暗闇の中にまた黒いものが動いている。私はとことん疲れ果てた気力を振り絞って、また大声で「冗談じゃないぞ、コノヤロー〜！」とクマに呼びかけると、その大きな黒い塊はすぐに去って行った。それでも私は、その暗闇の方向に向かっていくのはさすがに気が引ける。再びその作業道を戻り、ようやく里へと続きそうな林道に出遭う。藪漕ぎのない広くて歩きやすい林道をしばらく下って行くと、ようやく一軒の民家に辿り着いた。どうやら岩木山の麓の周遊国道に出たようだ、目的の26番カーブはおろか、入口ゲートよりも遥かに下、標高差で350mの下まで下ってしまった訳である。

灯りの点いた一軒の民家を探ると、そこには2人の老夫婦がいた。事情を説明して、ゲートの関係者又は関連バス会社に連絡は取れないかと尋ねると「今息子もいないし、近所の店の人も連絡は取れないので、分からない…」との返事。私はどうしたらいいか、濡れた雨具を着たまま玄関の外で途方に暮れていた。その時、1台のランクルが家の前に止まり、私に声をかけた。中にいた2人は何とゲート事務所にいたスタッフで、5時を過ぎて戻ってこない私を心配して探していたとのことだった。そうか、あの時、話をしたから、私が「巨木の森」入口に車を止めていることを知っていて、閉門後見回りに来ていたのだろう。

あの時、もしゲートを普通に通過していたら、おそらく彼らは知らぬままゲートを締めて帰ってしまったかもしれない。これも天の助け、やはり神はまだ私を見捨てたわけではなかったのだ。

●エピソード…物語はハッピーエンド?でもまだ終わっていない。

そんな訳で、もう8時を回る夜に、すでに閉まったゲートを開けてもらい、無事我が愛車に戻れたのである。これで万事めでたしということのだが、これで一件落着きと終わったわけではない。実は、ゲートスタッフはまだ戻らぬ私を心配して、地元の交番に連絡、パトカーが捜索しているという。すぐに連絡を取り、交番に案内され事情徴収。パトカーは1時間以上前から私を捜索していたそう。

何とか自力で下山し、遭難は免れたとはいうものの、これで一般的には遭難騒ぎということになってしまった。もしこれが普通の山であったなら、こんな騒ぎにはなっていなかったのだが、今回は5時間閉門かつ関係者が連絡を

取ったから、こうなった訳だ。そうはいっても、今回の場合はそのお陰で夜間閉門後に車に戻れたのだから、これが最良の結末であったことは間違いのない。天の神様、関係スタッフ、警察の皆さんにはただただ感謝のみ。

それと、夕方から電話をくれていた妻も、携帯が通じず、ずーっと心配していたことだろう。何と警察が私の車No.で自宅電話を割り出し、家に電話をしていたのである。妻は本当にビックリ、さぞや心配したことだろう。警察官曰く「奥さんはとてもしっかりした強そうな人ですね」と感心していた。これまでも遅い時間に宿に着いて、留守宅の妻に心配をかけたことが多々あった。その度に私は叱られるが、相変わらず未だに改心できていない。それでも基本的には私を信用してくれていて、どんな時でも気丈なふるまい、何よりも迷惑をかけた周りのことを気遣っているのだ。(内心では心配でしようがないのに)

ともかくこれで妻も(息子たちも)ひと安心、世話になった事務所の2人にお礼を言い、パトカーに乗せてもらい、ゲートを開け「巨木の森」入口に止めてあった我が愛車のもとへ無事帰還。もう8時を回り大分時間をロスしてしまっただけ、その後、真っ暗闇の田舎道を相馬村の宿に車を走らせる。明日からのツアーの前泊宿[ロマンピア相馬]は実に良心的なホテルで、9時を過ぎた遅いチェックインの私を快く迎え入れてくれ、レストランでの夕食も手配してくれた。

こうして数多くの人々、関係者のお助けで、翌日からの山旅ツアーのお客を無事、何でもなかったかのように青森空港で迎えることができた。この日は下見をした黒森という考えもあったが、とんでもないことだ。幸い?雨も強くなってきたので、岩木山も「巨木の森」も中止、雨でも歩ける白神山地の西目屋村アクアグリーンビレッジのブナ林遊歩道に急遽変更。あの黒森はいずれまた一人で再探索して、ゆったり歩きから健脚コースまで、いろいろなコースを用意しようと思う。今度の下見は朝一番でゆとりを持って歩きたいものだ。あの時に出遭ったクマも明るいうち、見通しのきく場所であったなら全然怖くない。次回はもっとゆとりを持ってあの元気そうなクマとまた会ってみたいものだ。

今回の体験で、私のクマに対する不安は完全になくなった、もう怖くない。しかしながら、これからも油断、過信は禁物、常に細心の注意を払ってブナ森を歩かねば。とにかくクマには先手必勝、まずこちらから先に見つけて声をかけることが何よりも重要な鉄則だ。だから霧やガスが濃く視界の利かない時は、絶対に森を歩いてはいけぬ。クマと突然出遭う危険が大きすぎるからだ。今度クマと出会う時は、天気の良い視界の利くブナ森で、またあの素朴な目をみたいものである。とりあえず、… 完 …

2019.8.18 By: Y. Hirano

*** 8月は山旅ツアーもお休みで時間があるので、これまで書けなかった山旅エピソードをまとめてみました。皆さんもこれから平野ガイドと歩く時は、クマの心配無用、安心して日本の素晴らしいブナ森を歩きましょう。**



ところで9月以降の山旅はまだ殆ど決まっていません。夏の暑さで疲れ果てグッタリしている皆さん、もういい加減に気合を入れなおし、一刻も早く9月以降、楽しい秋の山旅プランを練りましょう。宿予約の都合上、予約は出来るだけ早めにお願ひします。日程やコース、レベルの変更も可能ですので、ご希望その他、平野ガイドまで何なりとご連絡下さい。皆さんからのお電話、メールお待ちしております!

■コロミコ・トレック連絡先: ☎/ FAX: 045-481-0571
平野携帯: 080-5665-9186 ✉ koromiko2@pop07.odn.ne
HP: www.koromikotrek.com 又は[コロミコ・トレック]で検索